
強き燕は二度羽ばたく

龍々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強き燕は一度羽ばたく

【Zコード】

Z3718Y

【作者名】

龍々

【あらすじ】

もしもピアノが弾けたなら…では無く、もしも海燕が生きていたなら、というお話。

外伝にて海燕が復活する過程の様な物が書かれていますので、是非そちらも・・・

燕は再び繕はたいた（前書き）

二次創作にて始めてのオリキャラが皆無な小説。

海燕力ツコイイよ海燕。

海燕様キタ（。 。）！

それではどうぞ御覧下さい

燕は再び羽ばたいた

冷たい雨が激しく降り注ぐ中、小柄な女の死神の上に抱きしめる様に一人の男の死神が凭れ掛かる。

男の背には刀が貫いており、それを握るのは女の死神。

男の死神の名前は志波海燕、妻を虚に殺された挙句その虚に自分の体を乗つ取られていた。

そこを部下の朽木ルキアに解放されたのだが、それは死と同義だった。

「朽木い……俺の我儘に付き合わせてひでえ日に遭わせちまつたな……わらい、きつかつたろ……？」

海燕はルキアの頭を撫で、せめてもの謝罪を述べる。

「ありがとな……お陰で、心は此処に置いていける……」

海燕はその言葉を最後に体を地面に落とし、息絶える。

ルキアは海燕の名を叫んだ。

自分の心を襲う罪悪感を振り払うかのように。

現世で死んだ者は虚に墜ちた者を例外として、通常は死神の手によつてあの世、つまりは尸魂界へ送られるのだが、尸魂界で死んだ者は尸魂界を構築する靈子に分解される。所が海燕はそれらの例に当てはまらなかつた。

海燕の靈子は現世で再構築され、再び死神として蘇つたのだ。

「ここは……現世か？どういう事だ？俺は死んだ筈だよな……」

海燕は訳が分からないと首を傾げる。

海燕は現在、現世の街中を歩いている。

ここは空座町という町で、現世駐在任務でも幾度か来たことがある。尤も、以前来た時は江戸時代からだったので、初めて来た町といつても間違ひでは無い。

そんな中、抑えてはいるが隊長各の靈圧が感じられた為、そこへ向かう。

「浦原……商店？」

「ハイハイ！ そこの死神サン、何か御用で？」

いきなり男が後ろから現れ、海燕はそれに驚く。

そして店の中から黒猫が姿を現す。

そこまでなら普通の猫なのだが、その猫は話すことができた。

「お主……海燕かの？」

「うお！？ 化け猫！？ なんで俺の名前知つてんだ！？」

「誰が化け猫か！？」

化け猫、基黒猫は鋭い爪で海燕の顔に三本線の傷をつける。

その様子に海燕の後ろに立っている男が苦笑いしたのはまた余談である。

燕は再び羽ばたいた（後書き）

海燕は僕がBLEACHの中でかなり好感度上位だったりします。

もう全てがかつこよすぎる！！

でも僕が書くとかつこよくなのは何故！？

それでは次回もお楽しみに

燕は朽ちる女と玉笛つ（前書き）

タイトルでお察しかと思ひますが、ルキアと再会します。
若干カイルキ氣味。

あ、でもくつ付いてラブラブ、と言ひ切ではあります。
海燕には嫁もいたしね・・・

燕は朽ちる女と出会い

店の店主の名前は浦原喜助。

以前護廷十三隊の十二番隊隊長を務めていた男だ。

そして黒猫は四楓院夜一といふ、隠密機動の元総司令官もある。勿論、本来の姿は猫ではなく、海燕や浦原と同じような人間の姿をしている。

尤も、彼らは人間ではなく、死神なのだが。

海燕が現世で生活を始めてから数週間、靈子の薄い現世でも問題なく生活する事が出来た。

因みに海燕は暫くの間浦原商店で居候をする事になつてゐる。さらに浦原から貰つた滋養剤で靈圧を回復させ、現世でも魂界と同じ様に活動できる。

因みに滋養剤には髑髏マークが書いてあって、飲むのに惑つたのは失笑物である。

そして日々、虚退治をする中、死神と虚の靈圧がぶつかつてゐる、即ち戦闘している事に気付く。

「……あ、死神の方やベえな」

海燕は斬魄刀、捩花を携え、その場に向かおうとするが、浦原によつてそれを阻まれる。

浦原曰く、助けに行くのはもう少し経つてから、との事。

死神の靈圧は一瞬、薄くなつたが、その後直ぐに最初より増幅して蘇る。

海燕は不思議に思いながらも、浦原はこれを待つていたのだと察する。

「さ、死神サンの元へいきましょうか!」

浦原はいつも格好で海燕と共に靈圧がある場所へと向かつた。

「あ、あなたは……」

氣絶したオレンジ色の髪を生やした死神と白い着物を着た、力を失つた死神。

その死神が海燕を見て、驚愕している。

海燕の方はその死神を見て、驚くと共に嬉しそうな表情を浮かべる。

「海……燕、殿？」

海燕の名を呼んだ死神の名前は朽木ルキア。

海燕の嘗ての部下であり、自分を虚の呪縛から救つてくれた、女の死神。

尤も、ルキアの方は自分が海燕を殺したという自責の念に駆られているのだが。

「久しぶりだな、朽木！」

笑顔で自分の名を呼ぶ海燕にますます困惑するルキア。

海燕はどう説明しようかと悩んでいる。

「まあまあ、積もる話は後にして、今はこの少年とその家族の皆さんへの手当てをしましようか、もちろん記憶置換も忘れずに

海燕とルキアは浦原商店にて、互いの状況等を説明しあう。

海燕は戸隠界で絶命した後、現世で復活、ルキアは現世に駐在任務を言い渡された後、オレンジ色の髪をした靈感のある少年、黒崎一護と出会いその家族が虚に襲われて、ルキアも負傷して一護に靈圧を贈りし、今に至る。

「……海燕殿の説明が異様に短いのは気のせいでしょうか？」

「あー、気にすんな、俺も今一自分の状況が良く分かってねえんだ」

そう言う海燕を見て、ルキアは突然ホロリと涙を流す。

海燕はルキアの頭を撫でた後、優しく笑いかける。

「申し訳ありませんでした……海燕殿……」

ルキアは海燕の手を握り締め、海燕の生を実感する。

そして海燕はルキアの罪悪感を洗い流すようにルキアを抱きしめる。

「いいか、俺は虚に殺されたんだ。そして朽木は俺を救ってくれた恩人だ。朽木が気にする様な事は何一つねえよ。あの時、俺を救つてくれてありがとうな」

ルキアは海燕の言葉一つ一つに涙を流し、全てが救われた。

燕は朽ちる女と田舎つ（後書き）

海燕をカツコよく書けない……他の方の作品でみた海燕は感動するほどカツコ良かつたんですけど……ああ、どうしてこうなった。

燕は護る者に修行を施す（前書き）

海燕と一護の初対面です。

一護は恋次と白哉の登場の時までに原作より強くなるつもつです。

燕は護る者に修行を施す

ルキアの死神の力は現在、人間の青年、黒崎一護の中にある。

本来なら半分の力を渡した筈だが、何故か全ての力が一護に渡つてしまつた。

因みに原因は今の所一護の靈力が異様に高かつたから、としか解つていいない。

そしてルキアは一護に死神代行として働く事を承諾させた後、これから毎日特訓をしていく事になる。

だが、一護に修行を教えるのはルキアでは力不足、浦原では店の営業がある為忙しい。

すると当然

「今日からおめえに修行を教える志波海燕だ！よろしく！…」

と、なる訳である。

一護の反応は当然、誰だよ、となり、ルキアからは自分の上司、と説明される。

今一瞬に落ちない一護だが、強制的に体から魂魄を抜かれ、死神の姿になる。

その後海燕も義骸を脱ぎ、死神の本体が現れる。

「さて、修行第一段階だが……先ず一護、おめえには“始解”を習得してもらう！」

始解とは、死神の斬魄刀の一段階目の解放。

斬魄刀の持ち主によつて様々な姿形があり、能力も様々。

その名の通り直接攻撃を行う直接攻撃系、特殊な能力が備わつてゐる鬼道系と、様々種類がある。

「本当なら死神になつたばかりの奴に始解はムズインんだけどな……おめえは靈圧たけえから、ま、大丈夫だろ！」

いい加減に言う海燕を見て一護呆れた表情を見せるが、次の光景を見て、表情が強張る。

「水天逆巻け……捩花！」

海燕は刀を頭上に上げ、両手で器用に回転させる。

すると刀の形状が変化し、三叉の槍になる。

「俺の斬魄刀は捩花、つってな、水を操る流水系の斬魄刀だ……斬魄刀は解号と名前を呼ぶことで本来の姿を現す……一護の斬魄刀はどんな能力なんだろうな?」

海燕が得意げに笑うと一護は少し感心する。

自分の刀がどんな物なのだろうかと少しドキドキしてしまったのは内緒の話だ。

一護は現在、胡坐をかいた膝の上に斬魄刀を置き、精神世界に入ろうとしている。

斬魄刀の始解に必要なのは対話と同調。

対話は斬魄刀の本体との会話、同調は本体との靈圧のシンクロを指す。

さらに斬魄刀との絆を深める事により、刀に眠る力が解放されていき、それは死神の鍛錬の一つでもある。

一護は精神世界の中でサングラスと黒いコートを着用した髭面の男性とで出会い。

一護は名前を聞くもその言葉の名前の部分だけノイズが掛かつたようになに途切れ途切れになり、しつかりと耳に届かない。

「あんたが、俺の斬魄刀……か?」

一護は男性に自身の刀であるかを確認する。

男性はコクリと頷き、再び自分の名を口に出す。

「私はぞ……つだ。お前と会うのを楽しみにしていた、一護……」

「俺の名前をしってんのか?」

男性は再び頷き、自分が何であるかを話す。

「私はお前の力、そしてお前自身、……お前の知っている事は全て知っている。そしてお前の知らない事も……」

一護は男性の言葉に耳を傾けながら、この人物が自分の斬魄刀、力の源である事を理解する。

「なあ、名前は聞き取れねえけど、いつか俺があんたの名前を聞ける様になつたら力を貸してくれるか？」

「私はお前に力を貸すときは出し惜しみをしない。私の名前が聞こえたならば、いつでも力を貸してやるつ……」

「……つてな事を斬魄刀は言つていたぜ？」

一護は男性と話した会話の一部始終を海燕に話す。

海燕は公園のテーブルに座りながら一護の話を聞き、真剣な面持ちで相槌を打つ。

「ま、一回で名前が分かつたら誰でも死神になれらあな。そこまで会話出来ただけでも大したもんだ」

海燕は気さくに笑い、一護を好評価する。

一護は少し得意げになつた後、ルキアの方を見る。

「で、あいつは何してんだ？」

ルキアは真剣かつ緊張しながら大声でホラー漫画を音読しており、その場に異様な空気を流していた。

一護は自分の体に、海燕は義骸に戻つた後で休憩中。そして一護の背後に忍び寄る黒い影が一つ。

「くつろさつき、くーん……」

「ぎやあ！？」

一護にいきなり声を掛け、驚かしたのは井上織姫という、一護のクラスマイト。

人間に扮して学校に通つてゐるルキアは一瞬誰だか分からなかつたが、一護に教えられ、どこぞのお嬢様の様にスカートの裾を上げて挨拶する。

「あら、井上さん、ご機嫌ようー」

「「」、ご機嫌ようー」

少々、といふか大分天然の氣がある井上はそれに釣られ、自分もスカートの裾を上げて挨拶する。

一護が心中で井上にツッコミを入れたのは仕方のない事だらう。

「あれ、そつちの人は？なんか黒崎君に少し似てるけど……」

井上は海燕を見て不思議に思い、その疑問を素直に述べる。

海燕は何を言おうか迷った後、似てるのは偶然で、自分は一護の昔の知り合い、と話す。

その様子から見て、嘘を付いているのはバレバレなのだが、井上には十分それで通じた様だ。

そしてルキアは井上の右ひざを見て、ある事に気付く。

「井上さん……その傷は……ちょっと見せてもらつてもいい？」

ルキアはその傷を見て、険しい表情を浮かべる。

そして海燕の顔を見て、互いに頷き合つ。

何がなんだかわから無い一護と井上はそろつて首を傾げる。

一護は井上と別れた後、それぞれの家へと帰ろうとする。

海燕は浦原商店へ、一護は自宅へ。

この時、一護はルキアも海燕と共に行くのかと思つていたが

ルキアは何と一護の部屋の押入れの中にいた。

しかも妹のパジャマを勝手に着ながら。

「一護……虚だ……」

突然、ルキアが飛び出し、一護の魂魄を抜く。

そして一護がいた場所には巨大な虚の手があり、虚はそのまま家の外へと逃げた。

「どういう事だ……今のは井上の兄貴だつた……！」

一護の部屋に沈黙が走った。

燕は護る者に修行を施す（後書き）

原作に生き返った海燕が加わることの物語、一護&恋次&ルキアの輪
の中に海燕が加わる訳ですよ。
妄想全開です！いやつほつ！

燕は姫と巨人を助ける（前書き）

チャドと織姫の話。

燕は姫と巨人を助ける

一護とルキア、そして途中で合流した海燕が向かつた先は何と井上の自宅。

ルキアの話から魂魄は、虚に墮ちた後に先ず身内の魂を食らうとう事から虚、もとい井上の兄は先ず先に妹である織姫を襲うと予想する。

一護は相手がクラスメイトの兄であるという事から、斬る事に戸惑うが、海燕の話から戸惑いは決心へと変わる。

「虚を斬魄刀を斬るつて事は罪を洗い流すつて事だ。心を洗い流し、戸魂界にいける様にしてやるんだ。殺すんじゃねえ、昇華してやるんだよ」

井上の兄なら生前に大きな罪は犯していないはず、そう確信した一護は屋根を駆ける足のスピードを上げる。

一瞬、一護の背中に乗っていたルキアが振り落とされそうになつたのには、海燕も思わず笑つてしまつ。

井上の兄との戦闘の後、井上とその兄が和解し、兄は正気を取り戻した。

そして自分で刀を仮面に突き刺し、戸魂界へ昇華していった。

海燕は一護の修行の為、終始見てるだけで終わり、井上と遊びに来ていた有沢竜貴に記憶置換を終えた後で一護の肩を強く叩く。

「兄貴の存在理由がなんたるか……いつちょ前な事言いやがつて、この、このー」

海燕は一護の頭をロツクし、拳骨を捻じ込む。

一護は井上の兄に兄弟で兄が何故先に生まれてくるかをこいつ話した。兄は後から生まれてくる弟や妹を護る為に生まれてくる。

だから兄が妹に向かつて“死ね”等とは間違つても言つた、と。

「でもよ、俺もそう思うぜ？ 兄貴が何で先に生まれて来たのかがよ

？」

海燕には妹と弟が一人ずついるという。

海燕曰く、どっちも口より先に手が出る頭の足りない馬鹿、との事だが、一護は密かに海燕も似たような物だと思った。

織姫の兄の一件が片付いたその数日後、一護達はさらなる事件に巻き込まれる。

一護はルキア、海燕と共に一体の虚を追いかける。

名前をシュリーカーという、生前、連續無差別殺人という犯した根本から“悪”の外道だ。そしてさらにその虚が追っているのは茶渡泰虎という、一護の親友であり、通称をチャドという。

正確にはシュリーカーが追っているのはチャドが抱えているインコで、インコの体の中にはシバタユウイチという少年の魂魄が入つており、シュリーカーはその少年に三ヶ月間自分から逃げる事が出来たら母親を生き返らしてやる、という真赤な嘘を語る。

そしてシバタを助けに来た死神達を襲い食っていたという。

「野郎……とんでもねえ外道だな」

海燕はシバタの事を想い、思わず表情を険しくする。

「間違いなく奴は地獄に落ちるでしょう……」

ルキアの言う地獄に落ちる、とは一般の人間が言うような悪い事をするところの類では無い。

本当に落ちるのだ。

先日海燕が行つたように斬魄刀で虚を斬ると罪を洗い流し戻魂界へと送られる。

だが、洗い流せるのは虚になつた後の罪であり、生前に大きな罪を起こした虚は地獄に引き渡す契約になつてているという。

途中の道で一護は妹である夏梨を見つける。

「一護！お前はその娘を家に連れて行け！！あの外道野郎は……俺

がとつちめる！！」

海燕は義魂丸を飲み込み、義骸を脱ぎ去る。

そしてルキアと共にシユリーカーの下へと急ぐ。

『そーら、逃げろ逃げろーー早くしねえと俺のビルが爆発するぜえ！！』

シユリーカーは舌の笛で爆弾である蛭を爆発させていく。
恐怖感を煽る為に、中のギリギリの所でかわさせる。

「ム……！」

チャードはシバタの入った鳥籠を自分の両腕で蛭の爆発から護る。

「ダメダメヨー！ オジチャンシンジヤウ！」

シバタは必死にチャードを止めようとするともチャードは危険をかえりみ
ずにはシバタだけを護るつとする。

それは死んだ祖父の言葉から来るものであり、チャードはシバタをシ
ユリーカーから護る為に自分を犠牲にする。

『ほーらー！ 油断してると……』

シユリーカーは何時の間にかチャードの直ぐ真上で飛んでおり、爆弾
である蛭をチャードに投げつける。

『死んじまうぜええ！』

蛭がチャードに当たる寸前、その蛭は何かに吹っ飛ばされ、その蛭は
遠くで爆発する。

『てめえは俺がぶつ飛ばす！』

海燕がルキアと共にシユリーカーの元へ駆けつけ、シユリーカーは
新しい玩具が増えたとばかりに気味の悪い笑みを浮かべる。

一方海燕は解放前の斬魄刀を構え、シユリーカーを睨みつける。

『もう一度言うぜ……てめえは俺が……』

海燕は瞬歩でシユリーカーの後ろに回りこむ。

『ぶつ飛ばす！』

海燕とシユリーカーの戦闘が始まった。

燕は姫と巨人を助ける（後書き）

井上兄との戦闘ですが、それは原作と同じなので、割愛しました。

この小説での海燕の初戦闘。

海燕は“通常なら”圧勝する筈ですが……！？
次回をお楽しみに。

燕は魔に蝕まれる

海燕は解放した自身の斬魄刀を構え、シユリーカーに斬りかかる。ルキアは現在靈力が僅かしか持ち合わせていないので、チャドとシバタを非難させる事に専念する。

「転校生……さつき俺を追つていた奴は一体何なんだ？」

チャドはルキアにシユリーカーの事を訪ねる。尤も、チャド自身にはシユリーカーの事は見えてもいなければ声も聞こえないのだが。

「案ずるな……奴は直に地獄に落ちる」

ルキアの言葉に疑問を覚えながらもチャドは黙つてルキアの隣に立つ。

海燕は捩花から溢れ出る水流をシユリーカーに向け発射する。シユリーカーはそれを全て避けるが、時々掠つてもいる。

海燕は元護廷十三隊、十三番隊副隊長だ。

シユリーカーは死神を二人ほど食らつており、靈力もそこそこ高い。だが所詮はそこそこ、であり本物の実力と経験を重ねた海燕には遠く及ばない。

「テメエの悪事も此処までだ！地獄に落ちて反省しろ！！」

地に落ちたシユリーカーに海燕が斬りかかる。

が、海燕の手はシユリーカーに当たる寸前で止まり、もう片方の手は自身の頭を押さえる。

突然、海燕に頭痛が襲つたのだ。

「ぐううう！？何だ……こんな時に……ぐああ！」

海燕は遂に捩花を手から放し、地面にのた打ち回る。

これを好機と見たシユリーカーは、一旦距離を取り、大口を開けて海燕を食らおうとする。

『テメエは俺の三人目の餌だ！美味しく頂いてやるぜえ！！』

シユリー・カーの歯が海燕の肩に食い込む。

頭と右肩、両方の痛みが海燕に身体を襲い、肩からは血を流す。

『ん? なんだ?』この匂いは…… そうか、テメエも俺と同族じやねえか?』

『どういう…… 事…… だ』

海燕はシユリー・カーの発言に疑問を覚えながらも捩花を握ろうとする。

だが、如何せん、手に力が入らず、捩花は虚しく地面に転がる。

シユリー・カーは今度は海燕の腕に噛み付く。

シユリー・カーは海燕の腕から離れようとせず、海燕の肩から鮮血が舞う。

だが、シユリー・カーの仮面に一閃、刀傷がつく。

一護が戻ってきたのだ。

「大丈夫か海燕さん…… 何があったか知らねえけど、あんたがそんなになるまでやられるつて事はあいつ、強えのか?」

一護はまだ名前の分からぬ斬魄刀を抜き、シユリー・カーの方を向く。

そして一瞬でシユリー・カーの背後へ回る。

海燕から教わった“瞬歩”を使用したからだ。

一護は巨大な斬魄刀でシユリー・カーの背中を斬り裂き、次に足を刀で串刺しにする。

『ぎやああ!!』

「わかるか? 狩られる奴の恐怖が?」

シユリー・カーは自分で足を引きちぎり、空中へ逃亡する。

「そうだ、自分で足を千切つて逃げたくなる程怖えだろ? …… その恐怖を、たっぷり味わいやがれ!!」

一護は空中までシユリー・カーを追いかけ、仮面を貫く。

するとその空間から大きな門が現れる。
これは地獄の門、生前に罪を犯した虚を裁き、地獄に閉じ込める為の入り口。

シユリー・カーは大きな刀でその身を貫かれ、大きな笑い声を上げる地獄の使者と共に地獄に落ちた。

一護達はシバタの魂魄を元の身体に戻そうと試みたが、体と魂魄が長く離れすぎた為、因果の鎖が既に切れていた。

その為、シバタは「魂界へ送られる事になる。

チャドはシバタと別れの挨拶をした後、ルキアに記憶置換をされて虚に関する記憶が全て消された。

一護は傷ついたチャドを自宅、つまり黒崎医院に連れて行った。

一護と分かれた後、海燕は浦原に先ほどの頭痛の事を話す。

「……そうですか、確かに虚は、志波サンの事を同族、と言つたんですね？」

海燕は浦原にああ、と返事をした後、どういう事が尋ねる。

「えー、とにかく、死神にそう言う症状が過去にも確認されていてねえ、専門家を紹介しましょう。その人達はそういうの大得意ですから」

海燕は浦原に連れられ、ある場所に向かつた。

燕は魔に蝕まれる（後書き）

タグの内なる虚…（タメ）…ですね。
そして海燕の内なる虚は……おつと、危ない危ない。
次回をお楽しみに。

燕は仇と出会つ

海燕が浦原に連れられていつた場所とは、空座町の外れにある倉庫。さらに倉庫の地下には広大な空間が広がっており、浦原商店の勉強部屋に心なしか似ている。

違う所と言えば温泉がない事と何故かキッチンがあることだ。さらに言えば隅には某少年漫画や成人向け雑誌が綺麗に積み重なつていた。

「皆さーん！少し用事があるのでーーー！」

浦原が大声でこの空間の主を呼ぶ。

すると数人の男女が瞬歩を駆使してその場に姿を現す。

「何や、浦原？そいつ死神やろ？」

おかげで頭の青年、平子真子が海燕を指差す。

海燕の頭の中にはこいつ、何処かで見たことがあるな、という疑問でいっぱいだった。

当然だろ？

此処にいる男女等は過去に一人を除き護廷十三隊の隊長、副隊長だった者達である。

平子真子を筆頭に猿柿ひよ里、愛川羅武、鳳橋樓十郎、矢胴丸リサ、六車拳西、久南白、そして元副鬼道長、有昭田鉢玄のメンバーで構成されるのが仮面の軍勢という集団である。

浦原が海燕を此処に連れてきた理由は海燕の頭痛の原因にある。

それは海燕が現世に復活する経緯にあつた虚の靈子を吸収した事から海燕の中に入なる虚が巢食つてているので無いか、という事。

この仮面の軍勢は嘗て死神でありながら虚の力を手にしてた者達であるという事から此処に連れて來たのだ。

そして元五番隊隊長、平子真子が調べた結果、案の定海燕の中に虚の存在があつたという。

「ど、どうすりゃ俺の中の虚を追い出せるんだ?」

海燕の問いに平子はチツチツチ、と指を鳴らす。

「追い出すことは出来へん……飼い慣らすんや、自分の方が強い、つて叩き込んでな?」

平子の後に、元十二番隊副隊長、猿柿ひよ里がにやりと口角を吊り上げる。

「これはワレが“元”死神やから協力するんやぞ? 現役の死神だつたら放つておいたわ!」

この少女は死神や人間といった存在を嫌つており、それらの存在は殺すのも躊躇わない。

それをいつも平子が止め、ひよ里が平子をビツくのは平子にとって災難である。

三時間前、平子によつて意識を落とされた海燕の姿は段々と虚のそれに変わつていつた。

それを鉢玄、通称ハツチの鬼道によつて結界を張られ、仮面の軍勢がその中で順繰りに虚かした海燕と戦つ。

海燕の精神世界には海燕と同じ姿、唯一つ違つ所は色が全体的に白い所だろうか、その姿をした虚がいて、海燕に話しかけた。

『久しぶりよの、この世界の王よ……』

その声は虚独特の地に響く声をしていた。

そして海燕は虚の久しぶり、という言葉に疑問を覚える。

「お前なんか知らねえよ、生憎俺には虚の知り合い何かいねえんだ」

海燕がそういうと虚は一タリと口角を吊り上げる。

『……うむ、こりいえば分かりやすいかのう? “貴様の女は美味かつた”ぞ!』

瞬間、海燕は刀を抜き、虚に斬りかかる。

すると虚は素手でそれを受け止め、真剣白刃取り宛らの状態となる。

「てめえ……あの時の虚かよ……!…」

海燕は物凄い形相で虚を睨み付ける。

一方、虚は薄ら笑みを浮かべたまま、片手を離し、腰に刺してある刀を抜く。

そして海燕の頭に振り下ろすが、海燕はそれを瞬歩で避ける。

「テメエが俺の中にはいるとはな、胸くそ悪いっていつたらありやしねえ……」

海燕は内心で舌打ちをして虚を睨み付ける。

相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべたままの虚は刀を頭上に上げ、くるくると回し始める。

「おい……その動作は……」

虚は笑みを絶やさず、海燕のほうを見る。

『水天逆巻け……捩花アア！』

虚の刀は白い色をした捩花となり、槍の先端から水流を発射する。海燕も、自身の刀を解放した後、同じ動作をする。

「何でてめえが捩花を使ってやがる！？」

『当たり前であろう……我是貴様、貴様は我なのじや！……同じ技を使えて何の不思議がある！？』

虚は笑い声を上げながら海燕に斬りかかった。

燕は仇と田舎つ（後書き）

やはり海燕の内なる虚はメタスタシアでしょ、つ、と思ふ、こんな話になりました。

口調が良く思い出せない……

次回をお楽しみに

燕は魔を征する

精神世界で海燕が虚と戦つてゐる一方、現實世界では元九番隊隊長、六車拳西が虚化した海燕と戦つてゐた。

拳西の斬魄刀は断地風たちがぜというコンバットナイフだ。

能力は糸状の風を打ち放ち、相手を切り裂くという、海燕の水流を放射する捩花と属性こそ違う物の、少し似てゐる所がある。

尤も、海燕は現在、虚化していて、斬魄刀の能力を比べる事は出来ないのだが。

『ギヤオオオオオオ!!』

啼き声、姿共に虚のそれとなつた海燕の髪は蛇のよつになつており、体からはいくつもの手や足が生えていて、それはまるで海燕の体を乗つ取つた虚、メタスターの様になつてゐる。

「ちつ、この馬鹿野郎が!! 早く帰つてきやがれ!!」

今拳西が相手にしている虚は元々は海燕の物である体を使つてゐる為、戦闘力も半端なく高い。

元隊長である拳西も虚化すれば元副隊長である海燕を簡単に倒す事が出来るのだが、この戦闘の目的は海燕を倒す事ではなく、海燕が“戻つてくる”までの時間を稼ぐためである。

「拳西……交代や」

元八番隊副隊長、矢胴丸リサが結界の中に入り、拳西とバトンタッチをする。

「海燕……つていつたつけ? 悪いけど、手加減はせえへんで、覚悟しどき!」

リサは斬魄刀を鞘から抜き、瞬時に開放する。

「潰せ! 鉄漿蜻蛉はぐろとんぼ!!」

すると刀身が槍の様な、矛の様な姿に変形し、リサはそれを構えた。

虚化した海燕は口を大きく開け、口内にエネルギーを溜める。

それは虚閃セロという、大虚や破面特有の技、靈圧で構築されてゐる、

破壊の閃光で、虚の力を使う仮面の軍勢も使う事ができる。海燕は虚閃を放った後、リサに向かつて飛び掛けた。

精神世界で海燕は自分の姿をしたメタスタシアとの戦闘で、相手を劣勢に追いやっている。

「おい！テメエはそんなに弱い癖して、都を殺したのか！？ふざけんじゃねえ！本気を出しやがれ！！」

海燕は許せなかつた。

自分の愛するものがこんな弱い者に殺されたのかと思うと。

しかし次の瞬間、海燕の手から捩花が消え去り、メタスタシアは自身の持つ“捩花”で海燕を斬りさいた。

『ククク……忘れた訳ではあるまい？我には一日で最初に触れた物の斬魄刀を消滅させる事ができる……』

海燕は腹から血を流しながら、メタスタシアを睨み付ける。

現実世界にて、現在は平子が海燕と戦つてゐる。

『……もう、ギブアップかい！』

海燕から何を感じとつたのか、平子はハツチに何かの合図を送る。

ハツチはこくんと頷き、海燕を束縛する。

暴れる海燕を抑えるこの鬼道は海燕の靈圧を一時的に封じ、それと共に内なる虚も封じる、という物だつた。

『ほんの根性なしが……』

ひよ里が親指の腹を噛みながらそう言つて放つとそれを聞いていたのか、海燕が暗い表情をする。

『そう、だな……』

根性無しといつのを認める発言にひよ里は例の如く飛び蹴りを食らわせる。

その後、海燕が涙を流したのには、全員、見て見ない振りをせざるを得なかつた。

燕はキング オブ ハーモニー（～）ハモンド（記書き）

キングオブニュー・ヨーク……ブリー・チを最初の巻から読んでいる方はネタが分かると思います。

燕はキング オブ ニュー・ヨーク(?)と出金づ

現在海燕は一護に斬魄刀との対話をさせている。

斬魄刀との対話は自信の力を引き出す為に重要な事であり、それを行う事で本体との絆を深める事が出来る。

そして「一、二日で一護はようやく斬魄刀の名前を聞き出す」とが出来た。

名前は斬月^{さんげつ}、解号の無い、常時開放型の刀で、攻撃力に特化している。

一護によると、斬月はまだ力を隠し持っているらしいが、それもその内引き出せるだろう。

友人にはもちろん死神の事は秘密であり、虚の事や、自分が靈が見えるという事に関しては一切話していない。

一護が学校へ行っている間、海燕は仮面の軍勢の元へ向かう。

「おーい！修業に来たから開けてくれ！」

倉庫のシャッターの前で海燕が叫ぶと、内側から元三番隊隊長、鳳橋楼十郎通称ローズの声が聞こえた。

「オーケー、今開けるから待ってよ」

ガラガラとシャッターが上に上がっていく、ローズがはい、と少々気障に海燕に手を振る。

海燕はそれを気にすることなく、よつ、と軽く挨拶をし、地下へと向かう。

海燕が準備運動に腹筋をすると突然、鳩尾にひよ里の飛び蹴りに入る。

「おいコラハゲエー！暑苦しいから余所でやらんかいボケー！」

その表情は悪戯っぽく、尚且つ楽しそうな顔をしているのには気付かず、海燕は涙目になりながらひよ里の首根っこを後ろからつかむ。

「ここのガキ……何すんだよ」

海燕が表情を引きつらせながら言つと海燕の顔面にひよ里の拳が入る。

「だ～れが餓鬼や！…うちは大人の女性やつちゅーねん！…フレの眼は節穴かい！ハゲ！！」

その後、海燕とひよ里の楽しい追いかけっこが始まったのには仮面の軍勢の面々はひよ里を生温かい眼で見るほか無かった。

海燕とひよ里、互いに頭にたんこぶを作つた後で、虚化の修業をする。

海燕を氣絶させ、結界内に閉じ込めた後でまた一人ずつ戦闘を行う。

そろそろ一護が学校から帰る時間になり、海燕は浦原商店に一時帰宅する。

その時にひよ里が不満そうな顔をしたのはまた別の話だ。

「さて、一護ん家に行くか、」

海燕は店から出て、一護の家へと向かつ。

その途中で見覚えのある少年が住宅地の屋根の上を歩いているのを見かける。

尤も、それは歩いている、というより跳ねている、という表現をした方が正しいのだが、それは今はどうでもいい。

「一護……じゃねえよなあれば？……まさか、改造魂魄がありやあ！？」

改造魂魄、とはその昔、護廷十三隊の十一番隊、つまり技術開発局が作り出した対虚用の兵士であり、死体にそれをいれて戦わせる、という計画により作り出された。

尤も、それは死体を戦わせる、という非道さから廃案になり全て廃棄されたのだが。

つまり今海燕の前にいるのはその廃棄から逃れた生き残り、という事になる。

そして今改造魂魄が入っているのは一護の体、という事は何が何で

も止めなければいけない。

「待て。待ちやがれーー！」

海燕が追いかけてきたのに気付いた改造魂魄は捕まつてなるものなのかと速度を上げる。

海燕は瞬歩を駆使して追いかけるが、この改造魂魄は下半身を強化しており、足の速さは半端じやない。

吾輩は改造魂魄である、名前はまだない……なんてな、ジョークジョーク。

まあ嘘では無いけどな。

俺様は廃棄される恐怖から逃れて町を自由に散歩中。

馬鹿な人間の体に入つているのが少し不満だけど……人間達の視線がめっちゃ気持ちいい！！所が、その途中で死神が追いかけてきやがつた！！な・ん・で！？この町の担当はあの黒髪の姉さん一人じやなかつたのかよ！？嗚呼、綺麗なお姉さん！何処かに居たら可哀そうな俺を助けて！！

改造魂魄が内心で叫び声をあげながら海燕の追跡から逃げる。

海燕は息を切らせながら瞬歩の速度を上げる。

途中から、一護とルキアと合流するが、途中で虚の反応があつた。

何故か改造魂魄もそちらに向かい、三人はそれを疑問に思いながら改造魂魄を追う。

芋虫の様な虚と戦闘しているのは改造魂魄。

何故改造魂魄が虚と戦闘をしているかといつと、その理由は彼の生い立ちにあつた。

生まれた次の日には自分の廃棄する日が決まっており、毎日を法えて過ごした。

そして偶然、普通の義魂丸に混ざり、廃棄を逃れる。

だが、いつか見つかって廃棄されるのではないかといつ恐怖を感じ

ながら現世で浦原の元へ辿りつく。

そして“粗悪品”の箱に入れられ、遂に廃棄されるのかと思った矢先に、雨の手違いにより、自由を手に入れる。

その経験から命は誰かが勝手に奪つていいものではないと感じるようになり、彼は誰よりも殺生を好まない。

そして先ほど、虚が現れた場所には子供達の姿があり、改造魂魄はそれを救う為に虚の居る場所へと向かつたのだ。

改造魂魄の戦闘に、一護と海燕が加わり、虚は昇華される。

その後、蟻を潰しそうになつた虚を改造魂魄が蹴り上げて、建物から落ししそうになるなど、ハプニングもあつたが、この一件は落着するかと思ったが、そこに浦原がやってきて改造魂魄を廃棄すると言ひだすが、ルキアが浦原から改造魂魄を奪い取り、一護の義魂丸はこれでいいという。

「知りませんよ……何かあつたらあたしは姿を晦みしますからね……」

「元々靈法の外で動いてる貴様らだ、何も問題は無いだろう

」
画して、改造魂魄のコソ（命名一護）が黒崎家に厄介になるのだが、一護がこの先自分の義魂丸がコソでよかつたと思つのはまた別の話だ。

燕はキング オブ ハードコア(?) ハード(後書き)

「」の登場です

コンカッコイイしかわいいしで好きです
テレカブリーチで特別嫌いなキャラってルピ以外いない気がします。

一番好きなのはマユリ様です。

他にも剣ちゃん、海燕、えとせとい…

因みに今回のひよ里と海燕ですが、海燕にならひよ里も心を許すん
じやないかなあと書いた妄想です。

浦原の前の十一番隊隊長（名前忘れた）は母親を慕つかのようじ懷いていたと言つので、海燕はお兄ちゃんで良いかな、と。
尤も、ひよ里は素直になれない反抗期のお子様みたいになつてます
が。

それでは次回をお楽しみに

燕は……（前書き）

今日は殆ど一護のターンです。

燕は……

息を切らし、憎き親の仇を討とうと自身の斬魄刀、斬月を振り下ろす。

対して、その虚はそれを軽々と避ける。

上を良く見れば雨雲が空を黒く染める。

一護は“六年前の今日”を思い出しながら、母親の敵、グランドフイツシャーを睨み付けた。

それは数時間前に遡る。

その時は雨の気配など無く、外には晴れ渡る空が続いていた。

一護の部屋の押入れに住み着いているルキアと、何となく部屋に上がった海燕に一護があるお願いをする。

「死神業を休みたいだと？ 戯けめ！ そんな事が許される訳……」

ルキアの口を両手で塞いで海燕は一護に理由を聞く。

一護曰く、明日は墓参りだそうだ。

それも自分の慕っていた母親の

ルキアもそう言われて却下する訳にもいかず、渋々一護が明日は死神業を休む事を承諾した。

そして、最後の一護の一言が無ければ、黒崎家だけで行かせる心算だった

「明日はお袋が死んだ日 いや、『殺された』日だ」

一護の部屋に、暫らくの間沈黙が走った。

「おい、ルキア……オメエ本当にについてくるのか？ 今日ぐれえ家族だけの時間をだな……」

海燕の言葉を聞いて、ルキアは一回目を閉じて、言葉を整理した後、海燕の言葉に返答する。

「一護は母親が殺された

と言つておりました。それは若し

かしたら虚の仕業という可能性もあります。それを一護から聞かなければ……」

ルキアの主張に海燕は盛大に溜め息を付く。

まるで融通の利かない妹に世話を焼く兄の様に。

「わあつたよ……お前がそこまで言つんなら俺もついていく」
こうして、家族団欒の一時をルキアと海燕が邪魔をする事になったのだが、この時になつて、この選択は正しいと思つたのだった。

大好きだつた　　否、今でもお袋は大好きだ。

俺のせいで死なせてしまつた、家族の中心であるお袋を。

それは俺のせいでもあり、今、目の前にいる薄汚い虚のせいでもある。

こいつを倒す事で、お袋に償いが出来るのなら俺は

「俺はテメエを倒さなきやいけねえ！！」

一護は気合を入れるように吼え、グランドフィッシュヤーに斬りかかる。

石垣の上でルキアと海燕が一護と、その戦闘の行方を見守る。

腹から血を流しながらも、何かに取り憑かれたかの様に、一心不乱にグランドフィッシュヤーに斬りかかる。

だが、グランドフィッシュヤーは頭に付いている疑似餌を一護の母親の姿に変え、一護の攻撃の手を止める。

「止めて……一護、刀を引いて頂戴……母さんを斬らないで……！」

「！」

グランドフィッシュヤーが一護の母親、真咲を利用したのが運の死きだつた。

「こんなとこに……お袋の姿を抱き出してんじやねえよ……」

一護は斬月を握り締め、溢れる力を確かに感じる。

そして、刀からは声が聞こえ、一護はその声に耳を傾ける。

『一護……この外道を許してはならない。叫べ……それはお前だけの力だ』

一護はグランドフィッシュヤーの顔を睨みつけ、声を高らかに叫ぶ。

「月牙……天衝！！」

白い三田円型の斬撃がグランドフィッシュヤーの仮面を割り、そのまま胴体も真つ二つに割る。

だが虚の弱点である仮面を割つても直ぐにグランドフィッシュヤーが消滅する事は無く、まだ口も利ける状態である。

『クツクツク……ワシを殺して満足か？だが、貴様の母親殺しの罪は消える事は……』

ザク、とグランドフィッシュヤーの腹に斬月の刃が突き刺さる。

一護は無言で、汚物を見る様な目でグランドフィッシュヤーを見つめる。

「そうだ、俺の罪は消えない……俺がテメエの罠に引っ掛けられしなけりやお袋は死ぬ事が無かつた」

だから、と刀を振り上げ、グランドフィッシュヤーに止めを刺そうとする。

「俺がお袋を殺したから、だから償いに少しでも多くの人間を護るんだよ！！！」

斬月は、確実にグランドフィッシュヤーの仮面を捕らえ、その後で黒く変色し、グランドフィッシュヤーの体は消え去った。

グランドフィッシュヤーを倒した後で、呆ける一護の肩に海燕が手を置く。

そして唐突に、一護にある、質問をする。

「一護……心つてのは何処にあると思う？」

海燕は昔、ルキアに問い合わせた事と同じ事を聞く。

一護は当時のルキアと同じく、自分の胸に手をやり、其処に在る、と答える。

海燕は予想していた答えに苦笑した後、それは違うと言つ。

「心ひてのはな、此処に在るんだと、俺は思つ

そつこつて海燕は自分と一護の間に拳を置く。

心は誰かと誰かと触れ合つた時、其処に生まれるのだと、海燕は言う。

「オメエのお袋さんは、死んだ時に一護に心を預けたんじゃねえのか？お袋さんが、一人で死んだ時、オメエは傍にいたんだろ？だからお袋さん的心は一護の中にあるんだ」

海燕が諭す様に一護に言つと一護は俯き、「くせえよ」と一言言つた。

その後、二人の殴り合いの喧嘩が始まったのだが、それは一護に取つて、気持ちを切り替える事が出来るいいチャンスだった。

燕は……（後書き）

海燕にカツコイイ事言わせよ!と思つたのに全然かつじよくならしい……

何処かに文才落ちでないでしょうか。

見つけたら自分のところまでお届け下さい（笑）

此処からは、話を考えたはいい物の、入れる場所がない事に気付いてお蔵入りになった話。

浦原商店の一室でルキアともう一人、金髪の少女、猿柿ひよ里がにらみ合っていた。

それに巻き込まれているのは、否、むしろ争いの中心となっているのは海燕だ。

それは数時間前に遡る。

仮面の軍勢のメンバー、猿柿ひよ里が浦原商店の近くを通りかかった時、中から海燕の声が聞こえたので、中を覗いてみた。

すると其処には海燕と談笑をする女性、朽木ルキアの姿があった。何故か無性に腹立たしくなり十足で店内に入る。

「おい!ラーハゲツバメエ! その馬鹿面女はなんやねん! らーー!」
ひよ里が怒鳴るのを見て、ルキアが若干眉を吊り上げながら海燕に尋ねる。

「海燕殿……この教育のなつてない子供は何者ですか……?」
この一言が切っ掛けで、冒頭に繋がる。

見たいな感じでワードに書いてみたんですが、入れる場所が全然無いので此処に書きました。
評価等はこれ抜きでお願いします。

燕は国民的大スターと出立つ（前書き）

BLEACHの中で『いやみんてきすたー』と言えば『』の方しかいません。

ドン・観音寺です！！

……テレビの司会風に言つてみましたが、気にしないでください。
ただのおふざけですから。
まあ、観音寺好きなんですけどね。
キャラ的にも中の人的にも。
あそこまではつちやける一般人（？）も珍しいですよ。
うふふのふ

燕は国民的大スターと出合つ

派手な衣装を着た男が、テレビの向こうで何やら訳のわからない言葉を叫んでいる。

それは英語のなのだろうが、日本人にとって訳がわからないのは変わりがない。

男の名前はドン・観音寺。

本名を観音寺ミサオ丸と言うのだが、彼の職業は靈媒師兼芸能人。それも自身が主役の番組で毎週25%を取るほどに大人気の。

黒崎家では、一心と遊子が夢中になつて見ているのだが、逆に一護と夏梨は興味が無い。

因みに一心と遊子は共に靈が見えないという事から、観音寺に憧れていると見える。

尤も、遊子の方はうつすらと靈を見る事が出来るのだが。さらに一護は興味が無い所か、この番組の事が嫌いだ。

一護は自分が靈が見えるからか、靈、神などの存在が曖昧な物を使う商売が嫌いである。

だから雑誌のページにある、今日の運勢等も信じない。

だから、其処に新しい友達が出来る、等と書いてあってもこれっぽつちも信じていなかつた

のだが、一護は死神化した自分を視認する事が出来る男、

ドン・観音寺に戦友と書いて友と呼ばれたのには気が萎えた。

それを見て海燕は苦笑するのだが、追つてくる虚がそんな暇をとってくれない。

蛙の様な顔をした虚は口から粘液を吐き、此方の動きを止めようとしてくる。

一護が刀を振るおうにも此処は建物の中だ。

巨大なそれは相手に斬りかかろうとした時、天井に突き刺さつてし

まつ。

「此処が建物の中だつて事忘れてた……」

そんなミスをする一護に海燕は頭を抱える仕草をする。

因みに、一護の修業を図る為に手助けはしない。

「自分で何とかしろ……」

数歩下がつて一護を見守る。

一護は自棄になつて足で戦おうとするのだが、其処を何と観音寺が自らの持つステッキ、ただの棒なので^{テメエ}前は割愛するが、それを駆使して虚の動きを止める。

これには海燕も動かざるを得ず、観音寺を突き飛ばす。

「ノー！！へイ、コー！！何をするのかね！？私がこの怪物に敵わないのは分かる！だが、

せめてボーカを護つて散らうと……」

喚く観音寺の顔を踏みつけ、天井の、一護の刀が刺さつている部分を鬼道で破壊する。

「後は自分で何とかしやがれ……」

海燕は観音寺を引きずりながら後ろへ下がる。

その際に観音寺が喚いていたのだが、海燕はそれを無視して後ろへ下がる。

一護を捕縛し、屋上へと移動する虚を追つて海燕も屋上へ向かう。

「あの野郎……最近弛んでやがるな」

一護の体たらくを見て、そう嘆く海燕 の後ろを匍匐前進で付いていく観音寺。

この状況を一言で言^{カオス}うなら混沌^{カオス}というだらうか。

その混沌の中心に居るのが観音寺なのは言つまでもないだらう。

屋上、つまり開けた場所に着いてからといつ者の一護の動きは何時もの調子を取り戻していた。

それは狭い建物内に居たのもあらうが、観音寺という御邪魔無

視がいなくなつたのが大きいだろう。

「ボーアイ！私が来たからにはもう安心だ！！」

その御邪魔無視が態々此処に来たのは完全なる計算外である。

その後ろには面倒くさそう表情をしている海燕もいる。

「海燕さん……ちゃんと、監視しとけよ！！」

一回、二回、三回と斬りつけ、虚を弱らせる。

尤も、仮面を狙えば一撃で済むのだが、今の一護にそんな余裕は無い。

虚は高く飛び、上空に舞い上がる。

其処から先ほどの粘液を連射してくるのだが、一護の月牙天衝にて弾かれる。

そしてそのまま、三日月型の斬撃が虚の体を通り抜ける。

上半分と下半分が二つに割れた虚はそのまま、黒く変色し、昇華していった。

その後一護と海燕は觀音寺にある物を渡された。

それは觀音寺のファンクラブのメンバーズカードなのだが、直ぐに破り捨てたのは言つまでもない。

燕は国民的大スターと出立つ（後書き）

一番弟子の一護と一番弟子の海燕です。
いや、
だからどうとか無いですけど。

燕は今回出番無く……（記書モ）

まあタイトル通りです。

今回海燕は一言しか喋りません。

燕は今回出番無く……

虚を討伐するものの中に、死神とは別に滅却師^{クインシー}という者がいる。彼らは虚を憎み、昇華させるのではなく、唯、滅却する事、殺す事だけを考えた。

その結果、尸魂界と現世のバランスが崩れ、世界が破滅する寸前まで至った。

その事で死神達は滅却師達を殲滅する事を決定。

今回は滅却師と死神の葛藤を描いた話

それはとある夜の出会いから始まった。

何時もの様に虚を退治する一護とそれを見守る海燕とルキア。

何時もの様に、とつはいつも最近は何者かに虚が倒されている為、虚と遭遇する機会が無かつたのだが。

虚を倒した直後、眼鏡を掛けた、全身白の服を着ている青年が声を掛けってきた。

「こんばんは、黒崎君、朽木さん、それと……志波さんだったかな？」

突然現れた青年に警戒しながらも、刀を構えるという事はしない。彼は虚ではなく、人間だからだ。

「……向こうに虚が出たみたいだよ？」

青年の手首にぶら下げる十字架のアクセサリーが一瞬、光ったかと思うと次の瞬間には青白く光る靈子の矢となっていた。

「疾^いつ……」

その一言と共に矢を放つとそれは的確に虚の仮面を捉え、昇華、否、滅却させる。

「……滅却師、か？」

海燕が確認するように言つと青年はコクリと頷く。

「僕は滅却師の石田^{いしだ}雨^う竜^{りゆう}、死神を憎むものだ……黒崎に志波、君達

をね

あの夜の翌日に石田が自分のクラスメイトだと判明した一護は尾行を行つ。

勿論、靈圧のコントロールが苦手な一護に気付かない筈も無く

「ここまで付いてくるつもりだい？ 黒崎一護」となる訳である。

空座町とその周辺には、虚の大群が押し寄せていた。

石田が虚を誘き寄せる為の撒き餌を使ってどちらが多く倒せるかと言つ勝負をしようと言うのだ。

「僕に殴りかかる暇があったら走り回った方がいい。虚は靈力が高い人間を襲う筈だからね」

平然と言つてのける石田を突き飛ばした後、一護は虚を探すために空座町を走り回る事になった。

ルキアが戦つている相手はオランウータンの様な姿をした知能の低い虚。

得意の鬼道を放つても、死神の力は少しも戻つておらず、その鬼道は虚に直撃するも、幾分のダメージも与えてはいない。

虚がルキアに襲い掛かつた時、虚を蹴り飛ばすものがいた。それは一護の体に入ったコン。

ルキアに用があるのだが、如何せん探すのに夢中になつた為にそれは記憶の彼方にある。

「早く思い出せ……」

「痛い痛い！！痛いっすよ姉さん！ あ……俺何かに目覚めそつ……」

学校の運動場で虚に襲われているのは井上と有沢、そして二人の友人の本匠千鶴だ。

虚の能力で操られる男子生徒達を相手に、空手を得意とする有沢が奮闘している。

その様はメスの鬼を村人達が討伐しようと躍起になつてゐる様である。

「かかつてこいやーー！」

半ば暴走気味の有沢を虚が種子を撃ち込んで制止する。

運動場に井上と虚が立つてあり、先ほど種子を撃ち込まれた筈の有沢と本匠の傷は綺麗に消えている。

井上の周りに浮いてゐる、妖精の様な者達の言葉を復唱し、虚に攻撃をしようとする。

「椿鬼……孤天斬盾、私は拒絶する……」

井上は椿鬼を虚に撃ち込む。

虚は真つ二つに裂け、そのまま消滅する。

井上もその場に倒れたのだが、何故かその場に現れた浦原商店の面々に連れて行かれた。

そして握菱鉄裁つかびしどっさいの肩にはチャドが担がれており、一人共誘拐された

のではなく浦原商店へと運ばれた。

燕は今回出番無く……（後書き）

石田君、石田君、どうして君はそんなに白いの？

「誇りを持っているからだ！！」

さいですか。

とこり事で感想お待ちしています。

ちょっとくら編集した結果で、海燕は内なる虚を克服していません。
あれでは克服が早すぎるという指摘と自分もそう思った結果です。

燕は白と赤に遭遇する。

一護、海燕、ルキア、コン、そして石田。

今、この場に今回の事件の重要人物が集まっていた。

死神である一護、海燕、ルキア。

滅却師である石田。

そして改造魂魄のコン はあまり関係ないのだが、一応頭数には入れておく。

そして一箇所に虚が集まっているのを見て、石田がそれを追う。

「僕は君達の前で死神より滅却師が優れているのを証明する！！指を咥えてそこで見ていろ！！」

石田の言葉に一護は溜め息を付くが、次の海燕の言葉により、その表情が引き締まる。

それは死神の手により滅却師が滅んだという、学校の教科書には載っていない、歴史の闇。

「多分だが、あいつは自分の先祖の仇を討つために俺達に勝負を挑んだんじゃねえか？」

海燕の言葉に一護は何を思ったか、石田の元へ走り出した。

自分を邪魔する虚を蹴散らしながら、一護は石田の元へと辺り着く。一護が石田の先ほど海燕がいつた戦う理由を確認するが石田はそれを否定する。

「僕の戦う理由はそんなんじゃない……志波さんから何を聞いたか知らないけど、勘違いしないで欲しいね」

石田は過去に祖父を殺されている。

それを石田の口から聞いた一護は一瞬戸惑った表情をするが、直ぐに持ち直す。

石田の祖父、つまり師匠を直接殺したのは虚だ。

だが、石田の祖父は長年死神に訴えかけていた。

我らは強力すべきだと

そしてある日、祖父は虚に襲われた。

せんせい
滅却師と死神が繋がつていれば、直ぐに助けが到着し、祖父は死ぬ事は無かつただろう。

「優しかった、
師匠を殺した死神を、
僕は許す事が出来ないーー！」

そこで、た石田は辛そうな表情をしていました。

「そんな石田に一譲りな
話がなづえ！！」

飛び蹴り、
だつた。

「テメエの話、長くて最初の方は忘れちまつたけどよ……テメエの

一攫は田畠の端に里骨の端を顕す

「比神ニ威卯而バ協ノニニワゾ畏リ、つニ事ニラ

「なにでどうすんだー！」

卷之三十一

白の方が何体もの虚を一度に攻撃し、黒が一体ずつ、確実に止めを刺す。

そんな中、ルキアも、海燕も予想していなかつた事態が起こる。

大虚、幾百の虚が折り重なつた怪物が、現世に姿を現したのだ。

高く、咆哮を上げる大虚に石田は怯む。

て
い
る
！
！

その時、一護達の周りにいる虚が次々と消滅していく。

黒崎サン、助けにきましたよーん

扇子を口元に当てながら不適に微笑む浦原と鉄裁、そしてジン太と雨。

さらに海燕までもが辺りの虚を殲滅に掛かっている。

「周りの雑魚はアタシ達に任せて、アナタ達はあの大虚をお願いします」

一護は浦原の言葉を聞き、大虚元へと走つていった。

「浦原さん……あれを今の一護に任せて大丈夫なのか？」

浦原は海燕の問いに唯頷くだけで、それ以上は何も言わなかつた。

大虚に向け、一護は月牙天衝を放つ。

それを大虚は口から虚閃を放ち、応戦する。

一護と大虚では大虚の方が押しており、虚閃が一護の所まで届いた。

一護の靈圧は大虚と共に鳴し、段々と高まつていく。

斬月で虚閃を弾いている内に、勢いは弱まり、威力も弱まつていく。

「月牙……天衝！」

一護の刀は溢れ出る自身の靈圧に耐え切れなくなり、それを感じた

一護はそれを大虚に向けて打ち放つ。

それは大虚の体に傷を付け、大虚を追い返す事に成功する。

あの後、一護の靈圧は暴走し、刀の形状を保つ事が難しくなつていた。

それを石田が次自身の武器、弧雀（じきやく）で吸収し、空に向けて打ち放つ。

そうする事で、一護の靈圧を安定させようと考えたのだ。

靈圧の吸収、発射を繰り返していく内に一護の靈圧は安定し、段々と落ち着いていく。

「そんな顔してる奴殴れるかよ……」

一護は石田から顔を背け、そういつた後、立ち上がり、石田の肩を担いで傷を癒すために浦原商店へと向かつた。

夜の道を走り、息を切らせながら自身の犯した罪を頭の中で反芻する。

人間への力の譲渡、それがルキアの犯した罪。

ルキアは一護や海燕に迷惑をかけまいと、黙つて黒崎家を出た。

「私は間違つていたのか……？」

後悔の言葉ともとれるその言葉を吐いた時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

それは幼馴染である、阿散井恋次という死神の声。

恋次は自身の斬魄刀でルキアに斬りかかるが、ルキアはそれを間一髪でよける。

そして恋次と共にいるのは六番隊隊長、朽木白哉。

その白哉と共にいるという事は恋次は副隊長なのだろう。

少し会話をした後で恋次はルキアに再び斬りかかる。

が、遠くから見覚えのある青白い矢と、蒼い水流が飛んできた為、恋次の行動は制止される。

「お前……阿散井、だよな？ 何でテメエルキアに攻撃してんだよ？」

水流を発射した主、海燕がそう言つと恋次の表情は驚愕に染まる。

「何で、海燕さんが……死んだ筈じゃなかつたのか？」

恋次が驚いている間にも、海燕はルキアを自身の元へ引き寄せる。

そして恋次の後ろにいる白哉に田をやつた後で、生睡を飲み込む。

「おい石田、朽木と一緒に逃げるのと、俺と一緒に戦うの、どっちがいい？」

石田は眼鏡のズレを直した後で黙つて海燕の隣に並ぶ。

それを後者を選択するという意味だろう。

「勘違いするな、僕はクラスメイトを護りたいだけだ」

「へつ、俺だつて部下を護りたいだけだつーの！」

互いの利害を無理矢理一致させ、石田は遠距離から、海燕は近距離から恋次を攻撃する。

尤も、海燕の攻撃は、恋次を狙つた物ではなく、恋次の刀を使わな
くさせる為に鍔迫り合いを仕掛けた物なのが。

石田の狙撃が一旦止み、海燕と恋次が離れた所をまた狙撃する。

「どうして、阿散井……テメエがルキアに刀を向けてんだよ？ 何か
ちげえだろ？」

海燕の言葉に一瞬戸惑つた表情をした事から、それは彼の本意では

ない事が伺える。

「恋次……死人の言葉に耳を傾ける必要はない」

白哉は特に手出しをする訳でもなく、一言、恋次に向かつて口を開く。

「海燕さん……悪いが、やらせてもらひぜ……」

一護が向かつている場所には知らない靈圧が一つ、そして覚えのあら靈圧が一つ。

それは石田と海燕の物である。

一護は瞬歩を駆使してその場へと向かつ。

現場へたどり着いた頃には石田は氣絶しており、少し傷を負つてはいるが、まだ十分にた戦えている海燕と息切れを起こしている恋次が戦つていた。

白哉は相変わらず一人の戦いを見ているだけである。

「海燕さん！」

一護が瞬歩で海燕の隣に立つ。

「あの赤髪は“今は”オメエと同程度の実力だが……行けるか？」「行けても行けなくとも、どちらにしても行く……！」

「そうかよ」

一護は斬月を構え、恋次に斬りかかる。

一方で、海燕は白哉と相対し、捩花を構える。

「兄が何故此処にいるのか、そんな事はどうでもいい。私は任を遂行するのみ」

白哉は未解放の刀を構え、海燕に斬りかかる。

副隊長と隊長なら、どちらが強いかは戦わずとも分かる事だが、海燕は白哉の攻撃を見事に防いで見せた。

「こちとら毎日隊長名の連中と戦つてんだ……テメエが隊長だらうが簡単には負けねえよ……」

一護と恋次の戦いは、今の所一護が優勢だ。

その理由はまだ恋次が刀を開放していないからだろう。

「おい、テメエの刀はなんて名だ？」

恋次の突然の問いに、一護は簡潔に、答えを口にする。

「斬月だ」

そうかよ、一言行つた後と恋次が一步引き、刀の解号を唱える。

「咆えろ　　“蛇尾丸”！！」

瞬間、恋次の刀の形状は刃のついた鞭の様になり、一護の方へと伸びる。

それは一護の肩に僅かながらに掠り、少量の血を流させる。

「ラオラオラオラア！！」

恋次の刀は一護による暇を与えず、間髪を入れずに攻撃する。一護半ば強引に、斬月に備わっている唯一の技を発動する

「月牙……天衝！！」

それを食らった恋次は、後ろに吹つ飛びが、地面に脚を伸ばして踏みとどまる。

「効かねえんだよ！」

蛇尾丸を振るう恋次は今、何を思っているのか、幼馴染を傷つける自分は何なのか？その一瞬の迷いが、自身の腕を鈍らせた。

「これで、終わりだあ！！」

そう吼える恋次の猛攻を一護は容易くよけ鳩尾に斬月の柄の部分を強く打ち付ける。

恋次は倒れ、一護は息を切らしながら、彼方で戦っている海燕の元へと向かった。

燕は白と赤に遭遇する。（後書き）

……何も言わないでください（泣）。
ええ、わかっていますよ、駄文なのは。
後で編集しますので今はお見逃しください。

燕の魔は進行する（前書き）

前にも言いましたが、編集した結果で、海燕は虚を克服してしません。

それを踏まえたうえでじ覽になつてください。

燕の魔は進行する

海燕と白哉の戦闘は最初こそ両者互角だった物の、悲しきかな、副隊長と隊長の実力差は今すぐには埋める事は出来なかつた。因みに海燕は毎日仮面の軍勢と戦闘訓練を行なつてゐる為、副隊長の中では一番強い。

尤も海燕は“元”副隊長なのだが。

「……兄は何故、尸魂界に牙をむく」

小さく、夜の闇に消えてしまいそうな程に静かな声で、白哉は言つた。

「此処で尸魂界の捷だから、つて引いちまうとよ、今まで大事にしてきたもんが全部逃げちまう様な気がする、俺が俺じや無くなつちまう様な気がするんだよ。……理由の説明はこれでいいか？」

その言葉と共に瞬歩を駆使して白哉の後ろへ回り込む。

当然、その様な不意打ちに白哉が引っ掛かる筈もなく、逆に右肩から斜めに一閃されてしまつ。

「くだらぬ」

倒れた海燕を尻目に、ルキアを捕縛しようとしたルキアの方へ歩み寄る。しかし、それは一護によつて阻まれる。

「行かせねえよ」

「退け、羽虫が」

白哉が刀を振るうが、一護が巨大な斬魄刀、斬月の腹でそれを防ぐ。

一旦距離を取り、ルキアを下がらせた後で月牙天衝を放つ。

「貴様と私、何が違うか教えてやるう……」

月牙天衝に中の寸前で瞬歩を使ってそれを避ける。技を放つた後で、隙の大きい一護の後ろを取る。

「格だ」

一言、そう言つた後、死神の力の元である鎖結と魄睡を破壊しようとするが、一護は背中に斬月を回してそれを防ぐ。

「格……か?」

挑発するように言つ一護に白哉は無表情で再び刀を振るつ。

狙いは首、しかし一護は瞬歩でそれを回避する。

一護は内心焦つていた。

攻撃を回避する隙は合つても、攻撃を与える隙はない。

前者も、白哉が本気を出していなければ、恐らく斬魄刀を開放したら間違いなく殺られるだろう。

そんな中、一護にとつて希望の光が見えた。

海燕が目を覚ましたのだ。

しかし、それは希望の光を搔き消す、闇の渦を呼び込む物だった。

『主め……此処迄やられてまだ死なぬか』

その声は海燕の物ではない。

そう、それは海燕の心に巢食う、内なる虚、メタスタシアの声。

『殺されたい馬鹿はお前か……それともお前か?』

仮面の付いた顔を不気味に歪ませるメタスタシアは首の骨をコキ、コキと鳴らす。

さらにも一護と白哉、交互に指を指し、ジリジリと歩み寄る。

白哉に斬りかかったメタスタシアは白哉の手に持つ、斬魄刀を消滅させて、その中性的な顔に傷をつける。

『どうした、顔は傷つけては不味かつたかの!…』

狂氣の笑みを浮かべたメタスタシアは、白哉を一方的に痛めつけていく。

そんな中、怯えたような、何が起きたのか分かつていない表情をしたルキアが目に入る。

『お主は……我と共にこの体の主を殺した娘か?』

メタスタシアの言葉に、ルキアの表情は凍りつく。

『主……海燕、と言つたか?あやつは恨んでおつたぞ?忌々しい貴様のせいで殺された、痛かつた、苦しかつた、となあ!…』

ルキアのトラウマを抉るような言葉に、ルキアの呼吸は乱れ、体は小刻みに震える。

白哉は隙を見せたメタスタシアを斬りつけようとする。

しかし、メタスターの能力により、刀は消滅しており、その腕は虚しく宙を斬るだけであった。

死ね死ね死ね死ね死ねえ！！ 我の餌となれ、肉となれ！！ 貴様ら

死神はそれしか使い道が無いのだから！』

メタスタシアは叫びながら白哉を斬りつける

止めの一撃を、メタスターが食らわせようとした時、両の腕がま

るで別の意思を持つたかのように動く。

「何勝手なことしてくれてんだよ、引っ込め、馬鹿野郎！」

『ぐ……大人……しく、我に任せておれ……愚か者が……グウウ……』

苦しむように唸るメタスタシア、仮面を筆り取る海燕の腕。

両者一步も引かず、気を抜けじ
な 戦い を繰り広げてーる。

仮面を完全に筆り取り、中から現れた海燕の表情は、申し訳なさそ

うな涼して強気な表情ではない

悪がいたな。内の問題が勝手なことじたまへよ！」
血に濡れた白哉は怪訝そうな表情を浮かべるも、直ぐに立ち上がりつて手のひらに靈力を込める。

「破道の三十三」

水天逆巻け

互いに、今できる最大の攻撃を構え、放とうとする。

「捩花！」

蒼い閃光と蒼い水流がぶつかり合い、若干、白哉の方が押している。

海燕は靈力を込め水流の勢いを強くする。

一方、白哉はこれが限界らしく、海燕に押され、そのまま、後ろに吹き飛ばされる。

海燕と白哉、互いに力尽き、その場に倒れる。

気絶した海燕の下に一護とルキアが海燕の下に駆け寄る。

「大丈夫か、海燕さん！」

「海燕殿！！」

そんな中、現世と『魂界を繋ぐための門、せんかいもん穿界門が開いた。

中から出でたのは言うまでもなく死神。

それも隊長と副隊長の一人。

三番隊隊長、市丸ギンと同隊副隊長、吉良イヅルの両名である。

「ハイハイお疲れさん、でもルキアちゃんは連れてくで」

瞬歩でルキアの背後に周り、一護を吹っ飛ばしたあとで、ルキアの肩を掴む。

そして無理矢理に、せんかいもん穿界門へと連れて行き、暴れるルキアの耳元に口を近づける。

「また君のせいで誰かが死んだりするの、嫌やろ？大人しくしどき？」

その一言だけで、無力化したルキアをせんかいもん穿界門の中へと連れて行く。

「やめろ、テメエ、狐野郎！！それが死神のやり方かよ！？」

「その通りや……ホンマ、堪忍な？」

バイバイ、と手を振るギンに続き、白哉と恋次を担ぐイヅルが穿界門へと姿を消す。

その場には、気絶した海燕と、ギンの放つた鬼道のせいで身動きが取れないでいる一護が虚しく叫んでいた。

「魂界に到着したギンとイヅル、そしてルキア。

イヅルはギンに対してある疑問を投げかけた。

「あの少年ともう一人……顔は見えませんでしたがあの死神……何故殺さなかつたのですか？」

「なんや、僕が信用できへんの？」

ギンの問いに、イヅルはいえ、と否定したあとで謝罪をする。

「それにも……あの死神、何やつたんやろ？報告せえへんとな

ギン達はルキアを牢屋に入れるため、二番隊の地下へと向った

燕の魔は進行する（後書き）

市丸ギンの登場です。

一護を殺さなかつた理由、まあみなさんお分かりだと思いますが、一応まだ伏せておきます。

それはそうと、評価、感想等々、いつでもお待ちしておりますんでお気軽にどうぞ。

誤字脱字、おかしい所、ストーリーの駄目出し、なんでもいいです。どうぞよろしくお願ひします。

燕と母は修行をはじめる

地面に打ち付ける雨の音が鬱陶しく一護と海燕の耳に届く。雨が降つてゐるのは一護の母親と海燕の妻が死んだ日と同じ。さらに言えば、海燕が死んだ日もある。

勿論の事、海燕は現世で靈子が再構築され、蘇つてゐるので、海燕が死んだ日は関係がない。

「畜生……」

一護の声が口から発せられ、雨の中に消える。

海燕は未だ目を覚まさず、雨のせいで呼吸の音も聞こえない。

「あの日も、お袋を護れなかつた。今日もルキアを護れなかつた。俺は“一護”なのに」

一護は嘆き、己の無念を呪つ。

“何か一つを護り通せるよう”とつけられたこの名に泥を乗つてしまつた。

母親からつけられたこの名前に。

「畜生、何でだよ……」

頬についたう零は雨なのか、それとも涙なのか。

一護は意識が遠のき、そのまま氣絶する。

「ずいぶんと派手にやられましたねえ……」

聞き覚えのある、胡散臭いあの男の声。

雨が、止んだ気がした。

一護が目を覚ました場所は浦原商店の客間。

体はいつのまにか人間に戻つており、襖が開いたと思つたらそこからコソが姿を現す。

「おい！大丈夫か一護！一つたく、派手にやられやがつて…やれやれだな！！」

ルキアが連れて行かれたのが知らないのか、否、知つていて、尚一

護に明るく振舞うコンの表情は若干曇つておる。それでもコンは一護を責めようとしない。

「何で……だよ」

一護が小さく呟くとコンは「ああ? どう? きりぱつ」な返事をする。

「何で、責めねえんだよ? お前にとつてルキアは……」

そう言いかけた途中でコンは一護の顔面に蹴りを食らわす。

「そうだ! おめえ等が姐さんを助け損なつたから…… 次は絶対助けるんだろ!! 間違いなく助ける! 絶対助ける!! やれ助ける!!」

コンなりに励まして「のだろうか、身振り手振りを交えて一護に喝をいれる。

そんなコンの頭を掴んで一護はコンに笑いかける。

「つたりめーだ!! 今すぐにも助けに行つてやる!!」

一護とコンが騒いでいる間に開きかけだつた襖が一気にガラガラと開く。

「うつせーぞお前ら! オイ一護、浦原さんが呼んでっからこっち来い」

海燕は一護を連れて浦原のいる応接間へと足を進める。

「どうもおー黒崎サン。目が覚めたようでなにより。少し話がしたいのでそこに座つてください。」

浦原に誘われるまま、浦原の向かいの席へと座る。

海燕も同様で、一護と浦原の中間の席に座る。

「さてさて、朽木サンは『魂界に連行された訳ですが……お二人は勿論、助けに行くんですよね?』

浦原の問いに、一護と海燕は声を揃えて当然、と言つ。

よろしい、と浦原が頷くと突然、卓袱台の上に黒い猫が姿を現した。

「うお、化け猫! ?」

一護がそんな反応をすると一護の顔面に三本線の傷が刻まれる。

何処かで見た様な光景に、海燕は思わず苦笑する。

この夜一サンという名前の猫は人型に化けることが出来る。

尤も、人型の方が本来の姿なのだが、今はそこはどうでもいい。

夜一によるトルキアの処刑は今よりもっと後の日付であり、その間に一護と海燕に修行を施すとの事。

一護は浦原に、海燕は仮面の軍勢に。

一護の目標は誰かを斬る覚悟を手に入れること、海燕は虚化の習得とあともう一つは浦原が口に出さないため、今現在はわからない。

修行の開始は一週間後から。

それまで二人は傷を癒すことに専念した。

燕と母は修行をはじめた（後書き）

海燕の修行は虚化とも一つ、今は言えませんが、
その単語自体はブリーチを読んでいる方なら知っていると思います。

燕は敵を打つ（前書き）

一昨日まであんまり投稿出来ていなかつた為、今日は一つ投稿します。

燕は敵を打つ

海燕は現在、仮面の軍勢の元で虚化の訓練をしている。

虚化し、暴走した海燕を仮面の軍勢のメンバーが抑える。

そこまでならいつもと変わりがないだろう。

だが今は仮面の軍勢の虚化を解禁している。

その理由は今回の虚化が何時より激しい者になるだろうとの予測だ。海燕がシユリーカーと戦っている時に出た虚の力は海燕に頭痛を催す程度の物だが、つい先日、白哉と戦った時は表に虚の人格が出てしまっていた。

それはつまり内なる虚の力が上がった事を意味するだろう。

勿論、それは海燕自身が強くなつたから、それに乗じてメタスタシアも力を増したに過ぎないのだが、今度虚化の訓練をする時は前以上に暴れると予想された。

そしてそれは予想から現実に変わる。

「こ、こんのハゲ！！なんちゅう靈圧ぶちかましとんねん！！」

鬼のような仮面を装着し、虚の姿そのものとなつた海燕に斬りかかる。

海燕は嘗てのメタスタシアの様な姿になり、ひよ里に虚閃を放つ。ひよ里は素早くそれを回避し、海燕の足を一閃する。

『グオオオオ！』

口を大きく開け、咆哮を上げる。

それはひよ里を怯ませ、動きを止める為の物だった。

しかしひよ里は元護廷十三隊の十一番隊副隊長。

海燕と同じかそれ以上の戦線を潜り抜けた彼女にはその様な小手先は通用しない。

「そんなん効かんわ！ホンマにハゲた面しようつてからに！！」

隙を見せた海燕に今度はひよ里の方が虚閃を放つ。

それは海燕の体にヒットし、数秒、動きを怯ませる。

「ひよりん！交代だよ！」

白まじろが結界の中に入り、某ライダーヒーローの様なバッタを思わせる仮面を装着する。

「カイン！手加減しないけど死なないでね！行くよ、白キック！」

それらしくポーズを構え、海燕に攻撃する。

「スーパ超・白キック！」

次に先ほどと同じく強力な技を繰り出す。尤も、見た目は先ほどと同じである。

「スーパー・ウルトラ・白キック！」「ダイナマイト・白キック！」「えーと、スペシャル・デリシャス・白キック！」

技名こそ違うものの、全て同じ技であるのは言つまでもなく、しきしその蹴り技で海燕を追い詰めていく。

「止めはあ～虚閃！！」

虚特有の閃光を放つた白は「ビクトリー！」と言いながらガツツポーズを構える。

「さてカインはどうなったかな？」

テクテクと海燕に近寄り様子を見ようとする。

「馬鹿！…近づきすぎだ白…！」

拳西の忠告は既に遅く、白は海燕に吹っ飛ばされる。

「……丁度一時間や白、交代するで」

リサが先程の白と同じように十字模様の入ったダイヤ型の仮面を装着する。

海燕は頭に生えている触手の様なものを伸ばし、リサを威嚇する。

「生憎と触手プレイは興味ない、戻つてくるまで相手したるわ！！」

“外”で仮面の軍勢と虚化した海燕が戦っている中、“内”では生身の海燕とメタスタシアが内在逃走を繰り広げていた。

海燕はメタスタシアに触れないで戦うため、鬼道や捩花の能力だけを駆使して戦っている。

「これでも食らええ！！」

詠唱破棄で破道の三十一、赤火砲を掌から放つ。

海燕は死神なる前、靈術院生の頃からその秀才ぶりを發揮していた。入学から三ヶ月で始解を習得し、八ヶ月で鬼道は詠唱履きで六十番台まで放つことが出来る。

七十番台も詠唱付きなら出来る為、護廷十三袋は非常に惜しい人材を無くしたと言えよう。

「捩花あ！！」

斬魄刀の先端から水流を放ち、メタスタシアに撃ち放つ。

『効かんわ！！』

対して、メタスタシアも“捩花”から水流を放ち、相殺しようとする。

その威力は互角、海燕とメタスタシアの靈圧、靈力は繋がつており、海燕が強くなればメタスタシアもそれだけ強くなる。

このままでは埒が開かないと海燕は水流の威力を保ちながら鬼道の詠唱を放つ。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ……」

対して、メタスタシアは死神の訓練を受けていないため、鬼道を使用することが出来ない。

しかも海燕が鬼道の詠唱をしている事に気付いていないため、水流を止める事は無い。

「破道の七三、双蓮蒼火墜！！」

互いの放つた水流とは別に、その横から一本の蒼い閃光がメタスタシアに向け撃ち放たれる。

鬼道を回避すれば水流が襲い、水流を回避すれば鬼道がメタスタシアを襲う。

仮に両方とも回避する事が出来ても、その時に大きな隙が生じて海燕に急所を一突きされるだろ？

『己れええ！！』

結局、メタスタシアはどちらとも回避する事が出来ず、さらには左胸を捩花で一突きされてしまつ。

尤も、虚に心臓があるのかは不明だが、捩花をグリグリと左胸を搔き乱す。

『ふむ……我の負け、か』

「二度と俺の前に現れんじゃねえ」

メタスタシアはフン、と鼻を鳴らしたあと、黒く変色し、消えていつた。

現実世界では、平子が虚化した海燕と戦つていた。

しかし突然、海燕の動きが停止し、虚化した体に鱗が入つた。海燕が、虚を克服した瞬間だった。

燕は敵を打つ（後書き）

克服するのが早すぎ、といつも「いいせい」勘弁。

この後ソウルソサエティでルキア助けて、といつ流れがあるので、ノンビリやつてるとグダグダになつてしまつのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3718y/>

強き燕は二度羽ばたく

2011年12月1日14時55分発行